

「大正教養主義の起源」東京帝国大学教師 ラファエル・フォン・ケーベルと学生たち ——大正教養主義創成期の歴史社会学的考察——

松井 健人

本稿では、大正教養主義に多大な影響を与えたとされるラファエル・フォン・ケーベルに着目し、東京帝国大学での彼の活動と学生との関わりについて論じる。既往研究では、ケーベルがのちに大正教養主義を担う学生たちに大きな影響を与えたことは自明視され、その具体的な様相は検討されなかった。ケーベルから学生への単線・直線的な影響関係が所与のものとしてきたのである。本稿の検討の結果、ケーベルの講義に出席した大半の学生はそもそも彼の発言を理解できず、ケーベルの風貌・外見そのものを、教養を意味するものとして受けとったことが判明した。一方で、ケーベルは語学能力の堪能さや彼自身の性的趣向といった観点から学生を選別し、彼らを自宅に招き閉鎖的サークルを形成した。このような非線形的なケーベルと学生との関係性が実際には展開していたのであった。

1 問題の所在

——大正教養主義の原像、あるいは大正教養主義記述の定形をめぐって

本稿は、明治から大正期にかけての東京帝国大学におけるラファエル・フォン・ケーベル (Raphael von Koeber 1848–1923) の活動と、それが東京帝国大学学生とどのような関係性にあったのかを考察するものである。ケーベルは外国人教師ブッセの後任の哲学専門の教師として着任した。哲学科教授である井上哲次郎が招聘に動き、井上の依頼を受けた E.v. ハルトマンが、ケーベルを推薦したのであった。1893 年から 1914 年まで、ケーベルは東京帝国大学で哲学・美学・ギリシア語など学生に教えた。

これまで、大正教養主義にかんする多くの言及は、大正教養主義の源流としてケーベルを位置づけてきた。例えば、ケーベルは「日本における教養派の源流は、ケーベル博士であったといってもよい」という形で、大正教養主義の立役者として評価されてきた (橋川編 1971: 239)。あるいは、「多くの弟子たちに感化を与えたという点では、彼に匹敵する外人はほとんど見当たらずといつてよい」とケーベルが学生に与えた影響の大きさが指摘される (ピオヴェザーナ 1965: 52)。具体的には、ケーベルが東京帝国大学で哲学概論・美学・古典語を教え、その受講者たちに教養に関する影響を与えたと理解され、ケーベルの影響を受けた阿部次郎や和辻哲郎をはじめとした人々が、「教養」と「文化」の担い手として活躍したと整理される (荒川 1976: 742; 堀尾 1987: 271)¹。とりわけケーベルに関する言及でもっとも有名なものは、三木清の「教養の観念は主として漱石門下の人々でケーベル博士の影響を受けた人々によって形成されていった。阿部次郎氏の『三太郎の日記』はその代表的な先駆で、私も寄宿寮の消灯後蝋燭の光で読み耽ったことがある」(三木 1966: 387) という言葉であろう。

ケーベルが大正教養主義の起源であったという評価は、大正教養主義にかかわる研究においても同様である。『教養主義の没落』を著した竹内洋は、その著作の中でケーベルへの唯一

の言及に際して、「東京帝国大学講師ラファエル・ケーベルの影響を受けた漱石門下の阿部次郎や和辻哲郎などが教養主義文化の伝達者となった」と述べる（竹内 2003: 40）。また、日本における教養主義の生成について先駆的研究を行った筒井清忠においても、ケーベルは大正教養主義の「起源」として位置付けられる（筒井 2009: 99）。これに続いて筒井は以下のように述べる。

彼〔ケーベル〕の講義を通して学生たちに「教養」の理念が伝えられたことが十分に予測されるのであるが、残念ながら彼の講義録は残っていない。したがって、いつどのようにしてケーベルから教え子たちに「教養」の理念が伝えられたのかを特定することはできない。（筒井 2009: 100）

ケーベルの講義録そのものは現存しているため、上の記述は完全なものではないが、筒井もまた、ケーベルが学生たちに教養を伝えた蓋然性が非常に高いものとして見なしていることがわかる²。このように、従来の大正教養主義にかかわる諸研究は総じて、ケーベルは大正教養主義の源泉であり、ドイツの *Bildung* 概念を日本に伝えた人物であるとみなしてきた（坂本 1996: 68; 渡辺 1997: 39-41）。

東京帝国大学の学生たちにケーベルがあたえた影響は、以下のように示されてきた。米倉充は、ケーベルの人間像に特徴的な点として、「個人主義的な教養主義と学術的な文化主義」を指摘した上で（米倉 1983: 175）、「ケーベルの学生に与えた最大の影響は彼の学問もさることながら、むしろその人格にあった」と示す（米倉 1983: 201）。また、人格だけでなく、古典書物の読書を通して思想を学ぶという行為面での影響も、後の大正教養主義につながるものとして指摘されてきた（響庭 1976: 107-8）。さらに唐木順三も、大正期教養派がケーベルの下から現れたこと、そしてケーベルの影響が西洋古典を「あれもこれも」学び取ろうとしたところにある、と指摘する（唐木 1961: 383-4）。

しかし、ここに看過しがたい課題がある。ここまで、代表的なケーベルに関する言及、ならびに従来の大正教養主義研究におけるケーベルの位置づけを見てきた。ここには、一つの定型が存在する。つまり、三木清の言及あるいは筒井・竹内の研究に代表されるように、ケーベルを巡る言説において、「ケーベルの活動が大正教養主義成立に影響を与えた」という教養主義生成の単線的な歴史記述の定型が存在している。これまでの言及・研究における問題は、ケーベルを重要な存在として位置付けていながら、ケーベルそのものについては検討をほとんど行っていないという点である。大正教養主義の源泉でありながら考察の中心に据えられないことのない存在。それが東京帝国大学哲学科教師ラファエル・フォン・ケーベルであった。

さらにここで補足的にのべれば、大正教養主義との影響関係との関わりの上でケーベルの著作や活動を内在的に検討の中心的対象とする、という狭義の意味でのケーベル研究は皆無と言ってよい³。この状況に関して論者は、すでにケーベル教養論の内在的検討を試み、ケーベル教養論の特徴を明らかにした。具体的には、ケーベルの『小品集』（1918年出版）をはじめとした著作を中心として分析し、著作において展開されたケーベル教養論の性格を「教養と振舞いと結びつき」「人文主義的教養の重視」「ドイツへの敬意」という三点から特徴

づけた（松井 2018: 25-36）。しかし、この検討は、ケーベルの教養概念が学生にどのように影響を与えたのかについてまで及ぶものではない。

ケーベルが大正教養主義へ大きな影響を与えたことは、半ば定説とされている。しかしながら、東京帝国大学におけるケーベルの活動の実際についてはこれまでほとんど考察の対象にされることはなく、ケーベルがどのように教養概念を伝えたといえるのか、その在り方が解明されてこなかったのである。これらの課題は個別に精査されることなく、未解決のままに留まっていた。ケーベルの学生への影響は既往研究では具体的に検討されることはほとんどなく、大正教養主義像との類推に基づいてなされることがままあった。

このような状況に対して本稿の焦点は、ケーベルの教えを受け、後に大正教養主義を展開していくことになる当時の東京帝国大学学生が、如何にケーベルから影響を受けたのか／受けなかったのかを解明することにある。

とりわけ学生に対するケーベルの影響ならびに学生によるケーベル受容を考察する際には、岩波書店より刊行された雑誌『思想』のケーベル追悼特別号（1923年9月）に寄せられた回顧・回想を主要資料として扱う。無論、ある人物を考察する際に、その人物に関わる回想・伝記に依拠しすぎることは適切ではない。なぜならば、これらの資料においては、事後的に構築されたストーリー・ライン、すなわち「伝記的幻想」（ブルデュー 2005）が資料内容に伏在している可能性が高いためである。とはいえ、本稿がケーベル追悼号に依拠する理由は三つ存在する。第一に、ケーベルから教えを受けた元・学生がケーベルについて集中的に語るテキストとして、大正12年の『思想』ケーベル追悼号の諸文章が最大規模のものであるという資料的制約。第二に、先行諸研究においてこの追悼号の諸文章が網羅的に考察の対象とされたことが未だないという点。そして第三に、仮に「伝記的幻想」が介在しうる回想文であろうとも、かつて教えを受けた学生たちがケーベルをどのように回想し記述するのか。この点を複数人の文章にわたってみていく中で、ケーベルと学生との影響関係を、単線的・直線的影響関係を前提する既往研究とは異なる形かつ同時代の大正期のテキストに基づいた形で明らかにすることができるためである。

以下、本稿は、ケーベルがどのようにまず学生たちによって認識されていたのかを明らかにした上で（2-1）、現存するケーベル講義録および受講者の記したテキストに依拠して、ケーベルの講義のありようを解明する（2-2）。続いて、ケーベルの哲学講義を受講した人物たちが後年に記した『追悼号』をはじめとする諸テキストから、ケーベルがどのように受容されていたのかを詳らかにする（2-3）。そして、ケーベルの講義とその受容を考察することで、「古典語学習」がケーベルと彼を取り囲む大正教養主義を担うことになる学生たちにとっての重要な差異化の指標として機能していたことを指摘する（2-4）。3では、考察として、大正教養主義に対して、ケーベルがあたえた影響とはどのような内実であったのかについて述べたい。これらの検討を通して、近代日本における教養理念の生成局面をより詳細に捉えることができるだろう。

2 東京帝国大学におけるケーベルと教養

2-1 「教養の人」としてのケーベル

「その教養深き高雅なる人格が自ら周囲を薫した所に先生の匹なき尊さを思い出すべきであろう」。最初期のケーベルの講義を受けた西田幾多郎（1894年東京帝国大学入学：以後、判明する入学年または卒業年を示す）は、雑誌『思想』1923年8月号であるケーベル追悼号の中でこのように述べる（西田 1923: 32）⁴。

ケーベルは教養と結び付けられて語られる。たとえば、「入学後一年でふとしたことから哲学科に転じて主として哲学史を勉強した。その転科の重なる〔ママ〕理由は、当時哲学史の教師として在任されていたラファエル・フォン・ケーベル先生の崇高な人格と風姿に憧れて聲咳に接したいという少しく学問的らしくない願いからであった」（石原 1979: 334）と述べる石原謙（1904年入学）のように、ケーベルは教養ないしは崇高な人格と結び付けられて語られ、そのイメージが広く伝播するようになっていった。

東京帝国大学外においても「教養の人」としてのケーベル像が伝播されていたことをよく伝えるのが、安倍能成（1906年入学）である。安倍曰く、

私は國の中学に居る時から新しく来た文学士の先生によってケーベル先生という独身の聖者の様な人が文科大学に居ることを耳にして居た。其後東京に出て高等学校にはいった時に、友人の藤村が自殺して世間の批判が八ヶましかった頃、姉崎さんの書かれたものの中に先生の詞が引かれて、藤村の問題を to be or not to be の問題だといはれたと聞いた時、同じ様な思に苦しんで居た私は先生のこの言を嬉しいと思った。高等学校では岩元禎先生のお宅へ遊びに行った時よくケーベル先生の話聞き、岩元先生は先生のことを本当の man of culture だといってほめられた。（安倍 1923: 103）

このように、ケーベルは帝国大学入学以前の学生にさえ、「教養の人」として見られるとともに、その「人格」が高く評価されていた。ここで本稿の課題に照らし合わせて問うべきは、「教養の人」と「人格」が評価されていたケーベルから、帝国大学の学生たちがどのような影響を受けていたのかを明らかにすることであろう。次項では、帝国大学の学生たちとケーベル講義との関わりを明らかにするなかで上の問いに答えていきたい。

2-2 ケーベルの講義と学生

まず、ケーベルは帝国大学の講義でどのような内容について述べたのか。ここで残存するケーベルの講義録に目を配るなら、ケーベルが講義の中で繰り返し、ドイツ語を学習する必要性を説いていたことに留意したい。たとえば「アルツール・ショーペンハウエルは、翻訳書の外何物もなくして組成されたる書庫を美術の擬作或いは模造品の展覧会（殆ど価値なき展覧会）に比したり」とケーベルは述べ、ドイツ語学習の必要性を強調する（ケーベル 1897: 1-4）。美学の講義においても、ケーベルは英語で、ドイツ語 Vernunft と Verstand の差異を理解するために、ドイツ語を学習しなければならない、と主張する（Koeber 1894: 7-8）。

1893年のケーベルの哲学概論の授業を具体的に振りかえるのは、ケーベルの最初期の弟子

とされる桑木巖翼（1893年入学）である。桑木は、ケーベルが英語での講義の中で繰り返し、原語あるいはドイツ語での哲学書講読を勧めたこと、哲学を学ぶための基本書としてドイツセンによる『エレメンテ・デル・メタフィジック』を推薦し、その次の読書としてショーペンハウアーを推薦したことを記す（桑木 1923: 36）。

しかしながら、教養の人とされたケーベルの肝心の講義を、多くの学生は理解して居なかった蓋然性が高いことを見落としてはならない。たとえば、後にプラグマティズムの哲学者として活躍した紀平正美（1900年卒業）は、「講義には出ていたが、内容はよくわからなかった」とし、「学年試験は、哲学に関しては中世史の概略を書き、美学にはラオコン論に就いて所感を書いて誤魔化して置いた」（紀平 1923: 40-1）と振り返る。このようなケーベル講義を理解できないという体験は紀平に限られるわけではない。紀平が伝えるには「自分以前の学生は上述の如く、白紙を出してよい点をももらったり、試験に欠席していながら及第点をももらったりした」（紀平 1923: 44）し、紀平以外にも事情は同じであり、例えば上野直昭（1908年卒業）は「先生の講義で大学在学中に聴講したのは哲学史の一部と哲学概論にすぎなかった。それもよくわからなかったし、特に熱心でも、又多くの時間を割く余裕もなかった」（上野 1923: 179）とケーベルの講義を振り返る。

あるいは「私はケーベル先生がえらい人であるという事を地方の高等学校にいる時から聞いていた」という出隆（1913年入学）も以下のように述懐する。

椅子に腰かけたまま後ろの黒板に先生の書き流される希臘語やラテン語の字句を端に写し取るのが私の能で、それ以上には私の語学力の不完全と先生の変挺に発音される英語——概論はドイツ語でなくて英語で講義された——との故に殆ど内容的には何らの学得するところなく、ただ言はば物好きな聴講者の一人として先生の風貌に接したというに過ぎない。（出 1923: 115-6）

この要因は、ケーベルが日本語を一切使わずに、英語で講義を行い、さらに専門用語としてギリシア語・ラテン語・ドイツ語を多用したためと考えられる。「先生の講義は英語であったが、ギリシア語やラテン語などが沢山這入って来るので、分からないというのが定評であった」（高橋 1923: 107）という高橋里美（1907年入学）の回顧は当時の実情を伝えるものであるといえよう。あるいは、当時の新聞の紙面を見ても、「ケ先生の試験」と題して以下のようにケーベルの講義が報道されている。1914年の読売新聞の紙面は、以下のようにケーベルの講義を伝える。

文科大学ケーベル先生の試験が去る九日にあった。先生の講義は難解なので、平生皆失敬して余り出席しない。処がいざ試験となって、先生教室に入ってみると驚いた。満員の盛況。（『読売新聞』1914.6.12, 3面, 「ケ先生の試験」）

ケーベルの講義を十分に理解するには英語のみならず古典語・ドイツ語の理解が必要とされていた。しかし、それを満たす学生はごく少数であった。ゆえに、大半の学生は講義に出席してケーベルの風貌を眺めるか、それともそもそも出席せず試験を受け、単位だけを取得

していたのである。

2-3 学生はケーベルに何を見いだしたのか

では、前節でみたように、学生がケーベルの言葉を理解するのが困難な状況の中で、学生はケーベルに何を見いだしたのか。「教養の人」あるいは「崇高な人格」として評されていたケーベルの講義に出て、その講義を理解できないとき、帝国大学の学生たちはケーベルをどのように受容したのか。

先述した高橋は、講義を理解できなかったという言葉に続けて以下のように記す。

それでも私は在学三年間、卒業後更に数年間、連続して先生の講義を聴くことを怠らなかつた。しかし私が先生の講義を聴くことを喜んだのは、それによって学識を広めるということよりは、むしろ講義の時の先生の、如何にものびのびと、ゆったりとした態度や、晴ればれしく神々しい風貌に接したいというのが主なる動機であった。(高橋 1923: 107)

また、「ケーベルの哲学講義には分からぬながら出席して、その高風に接したことを感謝して居た」という、岩波茂雄(1905年入学)もその一人であった(安倍 1957: 96)。つまり、言葉も講義の内容そのものも理解するのが困難な中、ただケーベルの風貌だけが、教養を伝えるものとして受け取られていくのである。

このように、ケーベルの講義を聴きとり理解するのに困難を抱える学生が多い中、ケーベルの風貌のみがあたかも意味をもち、ケーベルの人格を伝えるものとして受け取られていくのであった。「先生は真の学者であった。教授法などは顧みられなかつたようである。教授法などで覆うことを要しない或る物が絶えず先生から輝いて居た。我々はそれに接することを喜んで先生の授業を受けたのである。先生は又稀に見る教養の人であった」(市河 1923: 77)という市河三喜(1906年入学)の回顧には、ケーベル自身を風貌として、つまりは鑑賞物としてみる受容の在り方が示されている。語学力不足のためにケーベルの講義内容から「何らの学得するところな」と述べた出も、同様の見解を示す。つまり、「他の大部分の聴講者に於ても恐らくそうであったように、私にとっても先生は大学の骨董品のように見えた。しかし何という高貴な『骨董品』でそれはあつた事であろう。あの物好きとこの骨董品とが人間教養に如何に深い意味を有するかを今にして私は知る」(出 1923: 116)。あるいは波多野精一(1896年入学)による「先生にとっては生其のものが芸術であり自己の人格自己の個性其ものが極めて尊き神聖なる芸術品であつたのである。先生が教養に重きを措き自らも深き広き豊かなる教養をそなへられたのもそのためである。この点に於いて先生はドイツのクラシック時代の伝統を豊かに体現された⁵⁾」(波多野 1923: 12-3)という言及も、やはりケーベル自身の風貌を、あたかも物として受け取り、教養・人格を風貌・外見と重ねあわせて受容する在り方を示している。

講義の言葉がわからない。しかしその人物は、人格が高潔な「教養の人」とであるとされている。そのような教師と学生の関係性は、次第に言葉を抜きにし、視認可能な「風貌」を尊び、教養ならびに人格を示すものとしてみなされていく。繰り返し確認すると、「教養の人」

と大学内外で評されていたケーベルであるが、ケーベルの発するメッセージを十全に理解できる人物は少なかったのである。大半の受講生は、「教養の人」ケーベルを、その外見である「風貌」と結び付け、一方的に受容していたに過ぎない。この時、教養・人格とは畢竟、西洋人の顔であり外見・風貌であったのだ。たとえば安倍能成は、ケーベルの「教養」がケーベルの「風貌」と結び付けられて受容される様を如実に記している。

我々学生がケーベル先生に引かれたのは、その学説よりもむしろその風格と教養とにあったので、先生の上品にして哲人的な風貌は、それだけで我々を魅する力があった。(安倍 1966: 406)

以上を踏まえれば、「日本人の教養ある社会を動かすのは、やっぱり先生〔ケーベル〕の天成の人格と、先生の足指の先端までもしみわたったカルチュアとの力であろう」(安倍 1917: 129)という安倍能成の言葉は、まさしくケーベルの教養と人格が混然一体のものとして受容されている様相を如実に示しているものとして捉えることができる。

2-4 ケーベル邸における学生との交わり

とはいえ、当時の東京帝国大学の学生たち全員が、ただ、ケーベルの外見を教養として受容していた、というわけではない。

「一層大きい感化は先生と直接接触するに至って先生の人格から来た」(和辻 1962: 26)と和辻哲郎(1909年入学)が述べるように、ケーベル本人と接触した学生がとりわけ彼の影響を強く受けたのであった。ここで、ケーベル邸に住み込み、ケーベルの家僕(Hausgeist)とまで言われた久保勉(1912年卒業)の以下の言を振り返れば、ケーベルとそれを取り囲むある種の「場」を見いだすことができるだろう。「ケーベル先生は教室で講義をせられたのみならず、毎週木曜日の晩にはよく学生や卒業生などを自宅に招いて御馳走をせられたりしました」(久保 1958: 54)。阿部次郎をはじめとした帝国大学の学生にとって、ケーベル宅での晩餐に参加することは重要な意味を持っていたのである(阿部 1917: 112; 安倍 1917: 129)。

では、どのような学生がケーベル邸に集まったのであろうか。ケーベルは「就職の初年以來、余は余の聴講者の古典的研究に対する感じ(Sinn)を覚醒するを以て余の任務として来た」と述べる(ケーベル 1919: 424)。また、「就中ドイツの文化、ドイツの学術及び文学に対する感じ(Sinn)を学生の中に喚起することに努められた」(久保 1923: 4-5)と久保も述べる。繰り返し古典語の学習を目標と掲げるケーベルにとっては、しかしながら、前節でみたような、英語でも意思疎通の困難がみられる帝国大学学生たちは、決して満足するにたりるものではなかった。ケーベルは自身の著作『続小品集』で、学生たちに洋書を推薦した経験を振り返る。「私は随分度々学生に推薦したものであるが、然しそれも、私の知る限りでは、唯だ三人しかそれを読まなかった所を以て見ると恐らく徒勞に終わったらしい」(ケーベル 1922: 31)⁶。

多くの東京帝国大学の学生はケーベルの講義をそもそも理解できなかった。そうであったがゆえに、ケーベルと学生との交わりは、必然的に「古典語を学習しているか否か」が相手を手を判断する基準になっていった。

たとえば、先述の市河によれば、自身がとったケーベルのギリシア語授業について、ギリシア語ができたクラスなので可愛がってもらえたと回顧し、中でも後に西洋古典学者として活躍した田中秀央（1909年入学）がクラスでケーベルの一番お気に入りであったと振り返る（市河 1923: 75-6）。ケーベルにギリシア語を習ったその田中自身が述べるには、学期始まりである9月始めには20人いたギリシア語授業も、12月には数人となり、ギリシア語二年次のクラスは田中一人になったという（田中 2005: 134）。古典語、とくにギリシア語を介するか否かは、ケーベルの学生評価にとっては最重要ともいえる基準であった。ケーベルに教えを受けた学生たちの中でも、とりわけ古典語ができることで評価された弟子として斎藤信策（1904年卒業）をあげることができる。姉崎正治（1893年入学）によれば、「[ケーベルは]『あの男は、ギリシアの言葉だけでなく、魂がわかる』」といって、彼を愛着された」（姉崎 1923: 201）という。かさねて石原謙によれば、斎藤信策についてケーベルは「自分は彼を愛する、彼はプラトンの学徒だ。彼は音楽では余り才を持って居ないかも知れない、がプラトンのイデーを確かに理解して居る」（石原 1979: 348）と述べたという。

また、単に語学のできる学生をひいきするだけではなく、ケーベルが学生に対して、或る種の同性愛的な関係性を展開したことは、これまでも指摘されてきた（高橋 1984: 120-4）⁷。中でも、ケーベル邸とそこで展開される学生との同性愛的な様相を最もよく示した具体例として、ケーベルの魚住折廬（1883~1910）に対する寵愛を挙げることができるだろう。東京帝国大学に入学した年である1906年の11月3日の書簡に「ケーベル博士の哲学史はよくは分らねどもよろこんで出席致居候」（魚住 1977: 191）したと記す魚住は、ケーベルの講義を受け続けるなかで、次第にケーベルに心酔してゆく。

1907年に、ケーベルが魚住のことを「すき」だと述べていたことを、石原謙から聞いた魚住は以下のようにケーベルへの思いを記す。「外の人から愛されたくはないが、ケーベル先生の一瞥をうることは無上の名誉である。願はくば先生の手を握りたい。膝に抱かれない」（魚住 1977: 253）。同年の5月28日に、「すきだから今度連れて来よ」というケーベルの命をうけた阿部次郎に誘われる形で、魚住はケーベル邸に訪問することを果たす（魚住 1977: 257）。以来、1910年に病によって夭折するまで魚住はケーベル邸を幾度となく訪れることになった。そして、訪問を重ねる中で、魚住はケーベルを「私が全世界に於てもっとも敬慕する人格」（魚住 1977: 265）として捉えるとともに、自身を「子」としてそしてケーベルを「父」として認識するようになっていったのであった。次の情景が象徴的であろう。

先生が私を baby と云はるるので、私が「私がベビーならあなたはお父さんです」といふ、又後ほどに先生が私に「子になるか」、私は yes! といふ。（魚住 1977: 264）

ケーベルの魚住への寵愛ぶりは、ケーベルの弟子たちにとっても奇異に見えたようである。魚住への性的偏愛をみて、ケーベルを尊敬する気になれなかった、という安部能成は様子を次のように記す。

先生の魚住に対する愛情は特別なもののやうに見え、魚住もその殊遇を光榮とし、家人や親近にその喜びを分かち居た。或る時の如きは、先生は我々の前で頬を魚住につ

け、魚住も如何にも嬉しそうに先生に抱かれて居たこともある。(安倍 1966: 407)

「私が非常に旅行を嫌い、新しい知人を造ることを甚だ好まず、またできるだけ少く——ただ通れられない場合にのみ——社交場裡に出る所以は、私は世界と社会をば、単に現実あるがままではなく、その真実の姿において知らんと欲すること、まさにこれがためである」(ケーベル 1928: 51) というケーベル自身の言葉と比べれば、ケーベルの学生に対する姿勢の特異さは歴然たるものがある。

ケーベルと魚住との間に生じた疑似的な父子的関係性は、ただ魚住のみに限ったものではない。たとえば、大正教養主義の代名詞ともいえる『三太郎の日記』を出版した阿部次郎とケーベルとの関係性においてもあてはまるものである。阿部は、かつて勉学に身が入らなかった時に、ケーベルから“First Abe does nothing”〔安倍能成が Second Abe であった〕と言われたことを、人生で一番難有い叱責であったと振り返る(阿部 1917: 134)。

自分は——これは当時先生から最も可愛がられていた魚住にも話したことが——先生の Prodigal Son であるような気がしていた。(中略) 併しこのプロディガル・サンは常に父を慕ふ心を持つているのである。(阿部 1917: 134)

このように、阿部は自身を放蕩息子 (Prodigal Son) として位置づけ、ケーベルを父として慕ったのである。勿論、これらのケーベルの態度が、学生に対してのみの特別なものであったことには留意しなくてはならない。帝国大学の同僚であり、ケーベル招聘に動いた井上哲次郎は次のように彼を評す。「哲学専攻の学者と云はんより寧ろデレツタント風の人であった(中略) 極めて皮肉家で、人の欠点短所を針を以って突く如く諷刺することが得意であった」(井上 1924: 51-2)。また、『追悼号』に寄せられた文章の中で、唯一ケーベルへのアンビヴァレントな考えを示すものに、先述の桑木によるものがある。桑木は、「先生の思想の基調たる文芸的浪漫的傾向には随行し得」たが、「その神秘的宗教的方面」に対しては共感することができなかったと述べる。桑木によれば、ケーベルの思想の神秘的宗教的特徴に加え、ケーベルの音楽好きがあわさって、ケーベル自身の雰囲気神秘的効果をあたえていた、という(桑木 1923: 34-7)。

このように自分の「すき」な学生に対しては自宅に呼びつけるなど特別の待遇を与える反面、ケーベルは古典語を解しない学生ならびに日本人一般を評価しなかった。西田幾多郎は、「我が国の学風の軽佻浮薄なるを嫌って居られた」としてケーベルを捉え、「私は日本の学生がギリシアやローマの語を学ぶとの困難なることを答えたら、古典語を知らずして西洋哲学を理解しようとする考の軽佻なることを説かれ」たと述べる(西田 1923: 33)。安倍は「先生は多く類を見ない教養の人である。西欧の教養を本当に身に体した人である」と述べ、その教養として、古典語、ドイツ語、ロシア語、フランス語を示すと共に、ケーベルと学生の関わりについて以下のように述べる。「学生の先生に対する理解は何といっても不完全なものであった。先生から見れば多くの学生は大抵頼みがいなき弟子であったに違いない。私の如きも遺憾ながらその一人であることを否定出来ない」(安倍 1934: 215-6)。ケーベルにとっては、「ギリシア語を知らない日本の思想も学問も文化も、多寡が知れてい」(姉崎 1923: 202)

たのである。

3 考察

3-1 学生によるケーベルの受容の様相 教養＝風貌としての受容

これまでみてきたケーベルの受容から、教養という概念がいかなるものとして展開していたのかについて考察したい。

学生によるケーベル受容については、「教養」が常に「風貌」と結び付けられていた点が重要である。むしろ「教養」と「風貌」が区別されていなかったと言っても良い。既に前章で検討したように、ケーベルの講義を聞いた大部分の学生にとって、そもそもケーベルの話す内容が伝わらず、やむなく「風貌」としてのみケーベルを受容していたためであったと思われる。

多くの学生は「教養の人」としてケーベルの存在を知り、その講義に分からないながらも出席し、ケーベルの外見あるいはケーベルが黒板に時々書きつけるドイツ語、ギリシア語の語句をその教養を体現するもの、として受容していたとみることができないのではないだろうか。そして、ケーベルの影響は和辻が述べたように直接人格に触ることができた学生、つまりケーベルの自宅を訪問した学生に対して色濃く表れることになる。

3-2 ケーベルの学生への影響

ケーベルと直接交流した学生はケーベルからどのような影響を受けたのか。久保は、ケーベルから学生への影響について「先生から受けたものは単に学問の上にとどまらない、その人格の影響と感化」と示し、「先生は身を以ってその模範を示したのである」と述べる（久保 1951: 34）。しかし、久保のみならず『追悼号』を初めとしたケーベルに関わる諸言説においても、その具体的なケーベルからの影響は不明なままである。

とはいえ、ケーベルと関わることで、「教養」を目指すようになった学生がいたことは事実である。具体例として、ケーベルからの寵愛を受けた魚住は、1909年10月26日に以下のよう

私は自分の思想や信念を小さい下らぬものだとおもう情が次第にまして来た、だから人を教え世を救うだという大それた傲慢な態度はもち得なくなった（略）今の私に学問は自己の教養（カルチュア）の外何の目的もない。（略）一個の man of culture たらんことが私の今の最大の望みである。（魚住 1977: 452）

このように、魚住はケーベルが称された「教養の人（man of culture）」となることを自己の最大の望みとしたのである。

これに並んで、ケーベルへの模倣を最も忠実に展開した人物として指摘することができるのが、旧制高等学校のドイツ語教師となった岩元禎（1894年東京帝国大学卒業）である。岩元によるケーベルの模倣は、ケーベル自身が「岩元はコーミッシュだ」と述べるほどであった（和辻 1962: 26）。また、旧制第一高等学校で哲学概論とドイツ語を教えた岩元の哲学講義

の構成は、ケーベルの講義録と酷似していた⁸。さらに、岩元の指導学生への同性愛・少年愛の振舞いもまたケーベルと一致する（高橋 1984）。甥の岩元紀彦による「“オレ自身が教養だ”という考えだったのではないか」という回想も、岩元禎の教養への姿勢を如実に示している（『南日本新聞』1980.12.17, 「希代の奇人学者 岩元禎・一高教授 自身を『教養』とした勉強家 美少年、秀才を愛した清潔癖も異常」）。

3-3 教養の閉域 ケーベルと大正教養主義

これまで見てきたように、東京帝国大学の学生の大半は、ケーベルの言葉を理解することができず、外見・風貌を「教養」として受容するにとどまっていた。これに対してケーベル邸に集った学生たちという極々狭いサークルにおいて、ケーベルの影響は発揮されていたのであった。しかし、その少数のケーベルの弟子たちのうちにこそ、その後の大正教養主義を牽引した重要人物たち（阿部次郎・安倍能成・和辻哲郎ら）がたしかに含まれていたのである。

ケーベルへの一般社会の評価と、これまでみてきた大正期教養派の学生との評価が著しく異なることが、このサークルの局所性を象徴している。当時の新聞報道におけるケーベルに関する記述をみると、その違いは明瞭である。「帰国せんとするケーベル博士 隠者の如き生活」（『東京朝日新聞』1914.7.9, 3面）、「ケーベル老博士 曾て東大哲学科の権威 露国領事館の一室に侘住」（『東京朝日新聞』1918.10.12, 5面）、「我哲学界の恩師 ケーベル博士危篤 横浜領事館に九年間の蟄居 女嫌ひの大沈黙家」（『東京朝日新聞』1923.6.14, 5面）と東京朝日新聞が伝えたように、大学外の人々にとっては、ケーベルは女嫌いの寡黙な哲学者、として映っていた⁹。

ケーベルとその受容を考える際に重要なのは、今日の我々が考えるように、「教養」が「人格」を形成する、という思考の回路はそもそも自明でないという点である。ケーベルはそもそも「教養」と「人格」を兼ね備えた存在としてみなされており、より重要な点は、それら「教養」ないし「人格」が「風貌」と結び付けられて受容されていたという、文字通りに表層的な受容の在り方である。

ケーベルの教養が、いかなる影響を大正期教養派の学生に与えたか。この点に関しては明確なアジェンダは存在せず、あくまで大正期教養派の学生は、ケーベル邸に集い、ケーベルを先生として仰ぎ、教養を希求するようになった学生もいたと結論付けることができる。唐木が指摘するように、ケーベルのもとに集った学生たちが「先生」というとき、それはただちにケーベル先生を意味していた。「彼らにとってはフォン・ケーベルだけがまことの『先生』」なのであった（唐木 1968: 377）。もっとも、この関係性は、すでにみたようにそもそもケーベルと会話するに足る語学能力を満たした学生や、あるいは魚住のようにケーベルの性的趣向に基づいた関係性の上に展開されるものであった。

4 本稿の結果と今後の課題 大正教養主義の原／幻像をめぐって

本稿では、大正教養主義の原像として位置付けられてきたケーベルに対して、彼の活動が、当時の東京帝国大学の学生たちにどのような影響を与えたのかを検討してきた。

結果、ケーベルの講義に出席する大半の学生は、そもそもケーベルの発話内容を理解することがおぼつかなく、ケーベルの風貌・外見を、教養を意味するものとして受容していたことが判明した。これに対して、阿部次郎をはじめとした一部の学生は、ケーベル邸という場に集う事で、ケーベルの人格に直接接触することとなった。ケーベルが英語かドイツ語で会話を行っていたという点を考慮すれば、学生が、言語能力を介して分節化されていたことが重要であろう。そして、ケーベルとの交流の中で影響を受けた学生たちの中には、「教養」をより追い求めるようになった学生が生まれたのであった。もっとも、ケーベルと学生との関係性は、いわゆる師弟関係として言祝ぐことができるようなものでなく、閉鎖的かつ時に性的な歪な関係性の上に成立していたものであったことに留意しなくてはならない。

本稿の結果が示すものは、ケーベルを大正教養主義の原像の一つとみたり、あるいはドイツの *Bildung* 理念を伝達した人物とみてきた既往研究とは異なり、多くの東京帝国大学学生によるケーベルの受容は、文字通りの意味として「表層」的な受容であったという事実である。他方で、ケーベル邸に集うことができた少数の学生の一部において、ケーベルと直接交流する中で「教養」を求めるようになった事例を確認することができた。つまり、学生たちは言語能力によって分節化されており、ケーベルから学生への影響関係は非線形的なものであったのだと示すことができる¹⁰。

これらの本稿の考察を踏まえると、今後の課題は、なぜケーベルが大正教養主義の起源とみなされるような評価が形成されたのかを検討することであろう。すくなくとも、従来のように、ケーベルと学生とを単線的・直線的影響関係のもとでみることは、もはやできない。本稿のように東京帝国大学周辺あるいは帝国大学教師ケーベルと学生との関わりのみに着目するのではなく、当時の文壇・論壇や思想潮流との関わりといった、より広い視座からケーベルが有していた位置価 (*Stellenwert*) を考察する必要があるだろう。さらに、言語能力が学生たちを分節化する要素として機能していたならば、東京帝国大学あるいは旧制高等学校の外国語教育についても、実証的に明らかにされていくべきであろう¹¹。つまり、ケーベルおよび周辺の歴史的な文脈を実証的に明らかにしていくこと。そしてその文脈をなぜ従来の大正教養主義研究が起源としてみなしていたのか、その解釈枠組みの在り様を再検討していくことが求められるのである。

また、教養概念の原像として指摘されるのはケーベルだけではない。冒頭の三木清の言及にあるように、ケーベルと並んで、夏目漱石が教養主義に大きな影響を与えた人物として挙げられるだろう。夏目漱石の教養理念の検討、ならびに弟子筋のいわゆる漱石山脈と大正教養主義の関わりへの検討も、今後の課題である¹²。

注

- 1 なお、一般的にケーベルの弟子とされるのが、西田幾多郎、岩元禎、姉崎正治、桑木徹翼、波多野精一、深田康算、阿部次郎、石原謙、上野直昭、岩波茂雄、安倍能成、魚住影雄、伊藤吉之助、高橋里美、岩下荘一、和辻哲郎、久保勉である（関根編 1997: 7-8）。
- 2 ケーベル講義に関しては木村（1974: 26-8）、長尾（2014: 1-16）を参照。なお、本稿でも部分的にケーベル講義録を参照するが、講義録において教養理念について詳細な言及がなされているわけではない。また、長尾の研究はケーベル講義録を詳細に検討したものであり重要であるが、あくまで考察の中心は高山樗牛・姉崎嘲風へのドイツ観念論の影響とケーベル講義録との関連にあり、ケーベル本人の学生への影響について考察するものではない。なお、ケーベルの講義題目については、完全な再構成は困難であるものの、現時点で最も整理されたものとして笠松（2019: 62-5）を参照。
- 3 大正教養主義とケーベル、という制限に限らず、資料的整理をのぞいて、ケーベル研究そのものがほとんどなされていない（松井 2018: 25-7）。
- 4 なお、本号は、「ケーベル先生追悼号」として副題が付けられている。より本文で本号に言及する場合は、『追悼号』と略記する。『追悼号』に寄稿した人物の略歴・ケーベルとの関係性等については、鈴木（1994: 9-10）を参照。
- 5 他に、ケーベルを学者としてよりも芸術家として評価するものとして、岩下（1962: 247）など。
- 6 シェリング『大学における研究の方法に関する講義』（Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums）と、バッチャー『ギリシア天才の二三の方面』（Some Aspects of the Greek Genius）の二冊であった。
- 7 もっとも、高橋（1984）では、魚住とケーベルの関係が取り上げられるものの、阿部次郎とケーベルとの疑似父子的関係性は検討されず、また魚住とケーベルの関係性の形成過程についても言及されていない。竹内洋は、阿部次郎に関する浩瀚な評伝『教養派知識人の運命』のなかで、魚住とケーベルの関係性に触れ、「ホモソーシャル（男同士の疑似同性愛的親愛・連帯関係）な師弟愛」（竹内 2018: 128）として性格づけているものの、あくまで言及に留まる。
- 8 岩元が旧制第一高等学校で教えた哲学概論の内容と構成の大半は、ケーベルが推薦したドイッセンの著作（“Elemente der Metaphysik”）に依拠するものであった（岩元 1944: 4）。
- 9 東京大学文書館柏分館「ケーベル関連資料」F0157-7-25 に収められているケーベル死後の報道記事（発行年月日・媒体不明）では、「ケーベルと久保勉氏 終始ついて廻つた門下で未亡人格」と題して、ケーベルの女性嫌い・独身主義が報じられている。その記事内のインタビューで、ケーベルについて久保勉は「非常に自由を尚ぶ人であったので、西洋の女の我がままさにはとても堪えられなかったのでありましょうか…」と述べる。
- 10 線分的な歴史認識を問い直すという意味において（佐藤 2001: 23-7）、本稿は大正教養主義創成期を扱った歴史社会学的考察としての性格を有する。
- 11 この点に関して、論者は大正教養主義とドイツ語との関わりに着目し、旧制第一高等学校のドイツ語教育の実態を明らかにしている（松井 2020）。
- 12 夏目漱石をめぐる「木曜会」において、本稿で検討した内容と重なるようなホモソーシャルな関係性が見られることも興味深い（椎名 2019）。注9でみた久保の女性蔑視と絡めて、大正期の人文系知識人層のホモソーシャル性が本稿の検討過程からも見出せることは興味深く、それ自体検討の価値がある。しかし紙幅ならびに本稿の課題と関係から、この点に関する詳細な考察は別稿にゆずりたい。

文献

なお引用にさいしては、旧字体、旧仮名遣いを適宜現代のものに改めた

【ラファエル・フォン・ケーベルの文献】

- Koeber, Raphael von, 1894, *Lectures on Aesthetics and History of Art*, Tokyo.
コエーベル, フォン, 1897, 『哲学要領』(下田次郎訳) 南江堂.
ケーベル, 1919, 『小品集』(深田康算・久保勉共訳) 岩波書店.
———, 1922, 『続小品集』(久保勉訳) 岩波書店.
———, 1928, 『ケーベル博士随筆集』(久保勉訳・安倍能成編) 岩波書店.

【ケーベル以外の文献】

- 阿部次郎, 1917, 「雑録」『思潮』1(2): 133-6.
安倍能成, 1917, 「雑録」『思潮』1(3): 128-31.
———, 1923, 「人間としてのケーベル先生」『思想』23: 89-105.
———, 1934, 『静夜集』岩波書店.
———, 1957, 『岩波茂雄伝』岩波書店.
———, 1966, 『我が生ひ立ち』岩波書店.
饗庭考男, 1976, 『近代の解体——知識人の文学』河出書房新社.
姉崎正治, 1923, 「ケーベル先生の追懐」『思想』23: 195-204.
荒川幾男, 1976, 「1930年代と知識人の問題——知識官僚類型について」『思想』624: 736-48.
ブルデュー, ピエール, 2005, 「伝記的幻想」(小林多寿子訳)『日本女子大学紀要——人間社会学部』16: 11-6.
橋川文三編, 1971, 『近代日本思想史の基礎知識』有斐閣.
波多野精一, 1923, 「追懐」『思想』23: 11-6.
堀尾輝久, 1987, 『天皇制国家と教育——近代日本教育思想史研究』青木書店.
市河三喜, 1923, 「ケーベル先生について」『思想』23: 75-7.
出隆, 1923, 「『私のケーベルさん』について」『思想』23: 115-22.
井上哲次郎, 1924, 「フェノロサ及びケーベル氏のことども」大日本文明協会編『明治文化発祥記念誌』大日本文明協会, 47-56.
石原謙, 1979, 『石原謙著作集 第十一巻』岩波書店.
岩元禎, 1944, 『哲学概論』近藤書店.
岩下壮一, 1962, 『岩下壮一全集 第九巻』中央出版社.
唐木順三, 1961, 「解説」唐木順三編『外国人の見た日本 4』筑摩書房: 365-87.
———, 1968, 「解題」『明治文学全集 49』筑摩書房, 374-83.
笠松和也, 2019, 「戦前の東大哲学科と『哲学雑誌』(資料集)」東京大学大学院人文社会系研究科『東京大学草創期とその周辺——2014-2018年度多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』, 53-85.
紀平正美, 1923, 「ケーベル先生を介して」『思想』23: 40-6.
木村毅, 1974, 「東京大学の英語講義(2)——ケーベル博士」『英語青年』120(1): 26-8.
久保勉, 1923, 「ケーベル先生略伝」『思想』23: 1-5.

- , 1951, 『ケーベル先生とともに』 岩波書店.
- , 1958, 「ケーベル先生のことなど」『心』11(1): 52-7.
- 桑木巖翼, 1923, 「ケーベル先生の思ひ出」『思想』23: 34-9.
- 松井健人, 2018, 「大正教養主義と R.v. ケーベル——ケーベル教養論とその歴史的 성격の検討」『関東教育学会紀要』45: 25-36.
- , 2020, 「旧制第一高等学校のドイツ語教育課程と教授方法にかんする史的考察——東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館第一高等学校関連資料を中心に」『東京大学文書館紀要』38: 1-18.
- 三木清, 1966, 『三木清全集 第一巻』 岩波書店.
- 長尾宗典, 2014, 「ケーベルの哲学講義——高山樗牛・姉崎嘲風の思想形成と『ドイツ観念論』」『史境』68: 1-16.
- 西田幾多郎, 1923, 「ケーベル先生の追懐」『思想』23: 32-3.
- ピオヴェザーナ, G, 1965, 『近代日本の哲学と思想』(宮川透他訳) 紀伊國屋書店.
- 坂本多加雄, 1996, 『知識人——大正・昭和精神史断章』 読売新聞社.
- 佐藤健二, 2001, 『歴史社会学の作法——戦後社会科学批判』 岩波書店.
- 関根和江編, 1997, 『ケーベル先生とその時代——資料集』 台東区芸術・歴史協会.
- 椎名健人, 2019, 「漱石をめぐる闘争——『木曜会』共同体にみるホモソーシャルな関係性」『京都大学大学院教育学研究科紀要』65: 201-17.
- 鈴木重昭, 1994, 「『思想』ケーベル先生追悼号の執筆者略歴」『ケーベル会誌』2: 9-10.
- 高橋英夫, 1984, 『偉大なる暗闇——師 岩元禎と弟子たち』 新潮社.
- 高橋里美, 1923, 「ケーベル先生の想い出」『思想』23: 106-14.
- 竹内洋, 2003, 『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』 中央公論新社.
- , 2018, 『教養派知識人の運命——阿部次郎とその時代』 筑摩書房.
- 田中秀央, [1970 頃] 2005, 「田中秀央自叙伝『憶い出の紀』」菅原憲二・飯塚一幸・西山伸編『田中秀央——近代西洋学の黎明』 京都大学学術出版会.
- 筒井清忠, [1995] 2009, 『日本型「教養」の運命——歴史社会的考察』 岩波書店.
- 上野直昭, 1923, 「おもひで」『思想』23: 175-92.
- 魚住折廬, 1977, 『魚住折廬書簡集』 岩波書店.
- 渡辺かよ子, 1997, 『近現代日本の教養論——1930年代を中心に』 行路社.
- 和辻哲郎, 1962, 「ケーベル先生」『和辻哲郎全集 第六巻』 岩波書店, 1-40.
- 米倉充, 1983, 『近代文学とキリスト教——明治・大正篇』 創元社.

(まつい けんと、東京大学大学院教育学研究科、qennto@hotmail.com)
(査読者 近藤和都、関根宏朗)

“Man of Culture” Raphael von Koeber and his Students:

A Historical Sociological Analysis of the Influence of Koeber
at Tokyo Imperial University

MATSUI, Kento

This paper examined the educational influence of Raphael von Koeber, who was a Russian-German teacher of philosophy at Tokyo Imperial University. In prior studies, he was evaluated as a pioneer of Taisho culturalism. However, the actual history of his scholarship has not been clarified.

Therefore, the purpose of this paper was to analyze how students of Tokyo Imperial University received Koeber's activities and how he influenced them. Two conclusions can be drawn from this paper: (1) The vast majority of the students from Tokyo Imperial University could not understand Koeber's lecture. As a result, they perceived the appearance of Koeber to define what culture means, and (2) Only a small number of students could visit his house. Some of them sought to gain more “Culture” (Kyoyo) due to the influence of Koeber's personality.